

平和のバトン

岡山県 岡山市立石井中学校 2年
平井 万裕（ひらい まゆ）

初めて訪れた広島平和記念資料館で、私はこれまで感じたことがないほどの激しい恐怖と深い悲しみに包まれていた。写真や遺品の一つ一つが、六十八年という時を超えて原子爆弾の恐ろしさと、傷つき、命や家族を失った人々の悲しみを訴えてくるようだった。学徒動員の遺品は、同世代の人の最後を物語っているようで、自分もその場にいるような息苦しさを覚えた。女学生が身につけていた制服は、原爆の熱線によって焼け焦げていた。全身に大やけどを負った少女は、どんなに苦しんだことだろう。「水、水。」と必死に水を求めながら亡くなったのだろうか。

中でも、今だに私の頭から離れないのは、中身が真っ黒に焦げた一つの弁当箱だ。弁当箱の持ち主の滋くんは、出征中の父と兄に代わって山や竹やぶを開墾し、一家を支えて畑を作っていたそうだ。その日の弁当は、自分が初めて収穫したものを使って、母親が作ってくれたものだったそうだ。心のこもった弁当を持ち、喜んで出かけた滋くんは、その弁当を食べることなく、たった十三歳で原爆の犠牲となった。母親のシゲコさんは、破壊された街を必死で捜索し、ようやく滋くんの遺体と、遺体に抱き抱えられた弁当箱と水筒を発見したそうだ。私には、黒焦げの弁当箱と、それを抱いて倒れている滋くんの姿が重なって見え、戦争が身近な恐怖として迫ってきた。

家に帰ってからも、滋くんの弁当箱は私の心から離れなかった。そんな私に祖母は、

「これを見てごらん。」

と、一枚の写真を見せてくれた。七十六歳になる祖母は、折に触れて私に戦争の話をしてくれるのだ。色あせた写真には、セーラー服姿で気をつけをしている小柄な少年が写っていた。祖母から、

「ばあちゃんの一番上の兄ちゃんが、中学三年で海軍に志願した時の写真なんよ。」

と聞いて驚いた。祖母の兄は、自ら志願して海軍に入隊したそうだ。兄の決意を聞いた時、父親はだまって何も言わなくなってしまい、母親は「豊の上で死なせてやりたい。」と言って兄にたくさんのびわを食べさせたそうだ。びわを食べて腹をこわせば、入隊できなくなると考えたらしい。当時六歳だった祖母には、兄の姿がただ立派に見えたそうだが、出征前の記念写真には、家族全員の泣きはらした顔が映っているそうだ。最後の写真かもしれないと考えながら家族写真を撮

ることは、親としてどんなにつらいことだったろう。自分が思い出す家族写真といえば、七五三の着物姿や、ディズニーランドやハワイでの楽しい思い出写真ばかりだというのに。

その後、祖母の兄は、自分の小指を切って血判状を書き、自らが爆弾となる人間魚雷に志願したそうだ。祖母は、

「兄ちゃんが、呉から横須賀に向かうという連絡を受けた時、母ちゃんは、一郎の姿を一目見ようと、岡山駅に行ったんじゃない。でも近づけずに踏み切りで待ってたら、シャッターが下りた列車の窓から、兄ちゃんの手だけが見えたんじゃない。」

と教えてくれた。たった一つ見えた手が、息子の手に見えたという曾祖母の言葉は、「弁当を食べることなく死んだ息子が不憫でならなかった。」という滋くんの母の言葉と重なって、戦争中の母の悲しみを教えてくれた。幸いにも出撃前に終戦を迎えたそうだが、自分と同じ中学生で原爆の犠牲となった滋くんと、国のために自分の命を捧げようとした祖母の兄の生き方があまりにも悲しかった。そして、平和な時代に生まれた自分は、何をすればいいのかと考えるようになった。

原爆投下から六十八年目の今年、広島市の平和記念式典を伝えるテレビには、私が訪れた平和記念公園が映っていた。こども代表は、「平和の誓い」の中で、『あの日から目をそむけません。もっと知りたいのです。被爆の事実を。被爆者の思いを。もっと伝えたいのです。世界の人々に、未来に。』と訴えていた。思えば祖母も七十六歳。私はおそらく、祖母から直接戦争の話を書くことのできる最後の世代になるだろう。祖母の戦争の話はいつも決まってこう締めくくられる。

「戦争で幸せになった人は誰もおらん。」

この言葉に込められた意味を真剣に考え、二度と戦争を繰り返さないのだという強い意志を受け継ぐことが、今の私にできることなのかもしれない。「いってきます」と言って母さんが作ってくれた弁当を持ち、大好きなバスケットボールをし、からっぽの弁当箱を持って「ただいま」と帰宅する、このあたりまえのことのできる幸せに心から感謝したい。

私はこれからも、戦争のことをもっと知りたい。もっと伝えたい。滋くんや、祖母達の世代が命をかけて手渡してくれた「平和のバトン」を、必ず次の世代に引き継ぐために。